二〇二六年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦書）

【答案作成上の注意事項】

1、解答用紙の最初に記されている時代・分野のうち、自分の選択したものを〇で囲むこと。

2、「近代」以外の時代・分野の答案は、縦枡目（表裏）の共通解答用紙に記すこと。

3、「近代」は、解答用紙が別になっているので、それを使用すること。

＊各時代・分野の試験問題は、左掲のナンバーの問題用紙に記されている。

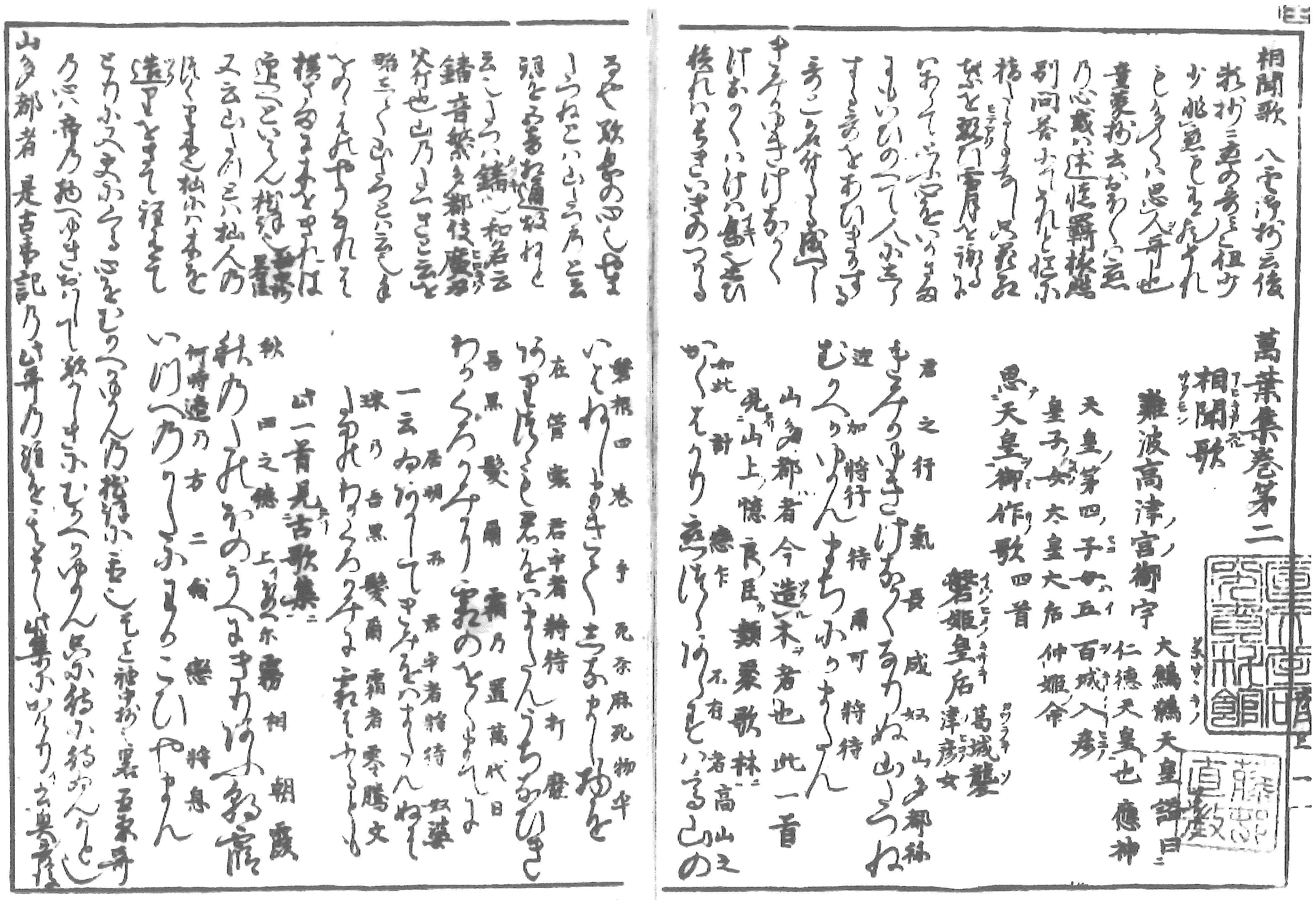
上代	2
中古散文	3
中古韻文・中世韻文	4
中世散文	5
近世	6
和漢比較文学	7
近代	8～11
日本語学	12～14

二〇二六年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学 コース　※解答は別紙（縦　書）

上代

問　次に掲げる資料は、『万葉拾穂抄』の一部である。これについて、後の問一・二に答えよ。



萬葉集巻第二

相聞歌

難波高津宮御宇天皇代　大鷦鷯天皇諡曰仁徳天皇也

磐姫皇后思天皇御作歌四首

問一　注釈の対象となっている和歌四首の訓み下し部分を、翻字しなさい。改行は原文のままとし、漢字・仮名は現在通行の字体に改めること。

問二　この資料から読み取れる事柄について、論述しなさい。

2 / 14

二〇二六年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学　コース　※解答は別紙（縦書）

中古散文

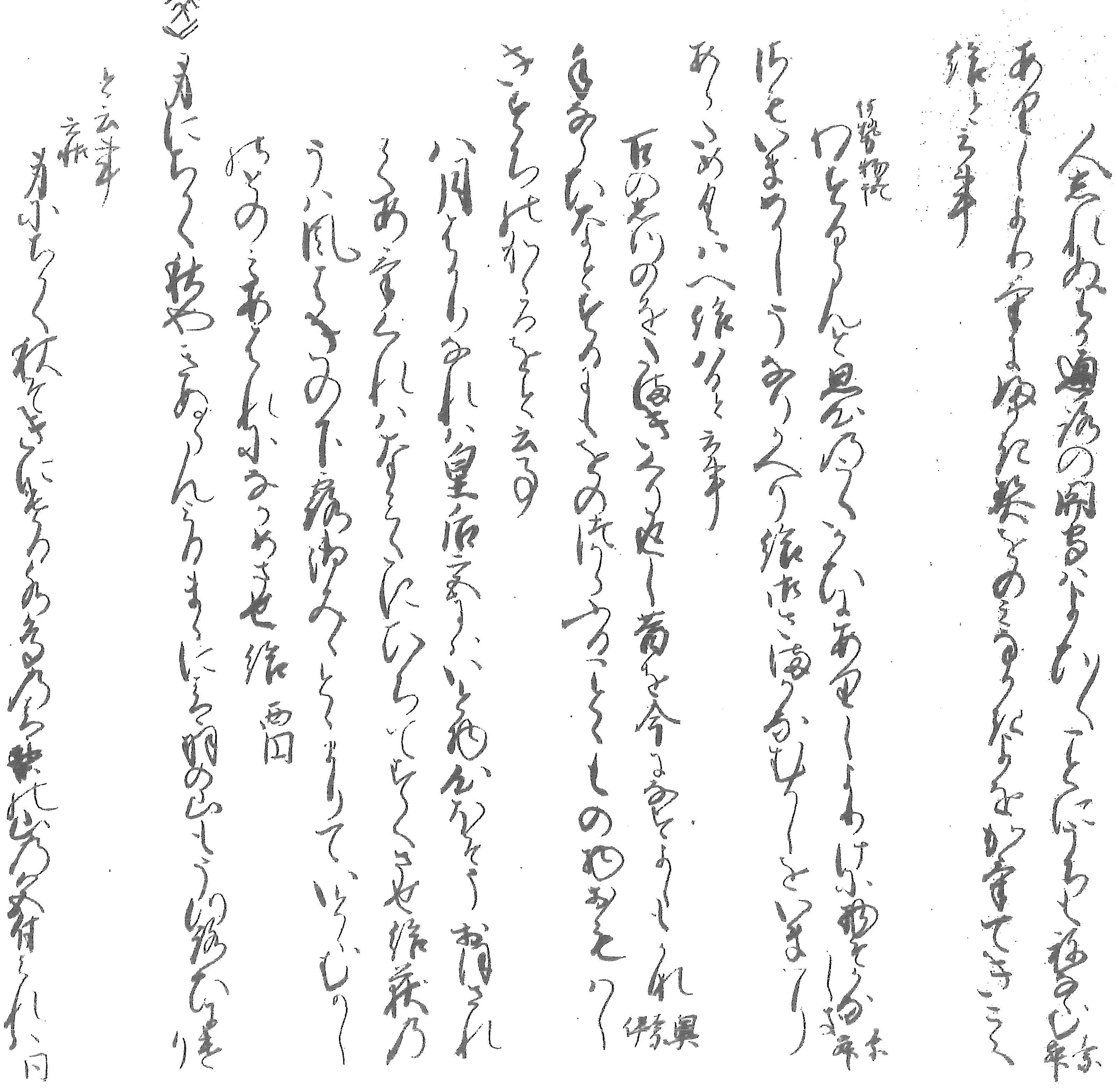
左は、鎌倉時代に成立した『源氏物語』古注釈書における「若菜 上」巻の一部である。次の問いに答えよ。

（1）左の全文を改行等そのままに翻字し、適宜必要な箇所に句読点、濁点を加えよ。傍記等も翻字すること。

（2）この古注釈書の名まえを記せ。

（3）この古注釈書の概要と特徴について述べよ。

（4）《X》の歌を詠んでいる作中人物名を明示しつつ、この歌に詠まれている内容を説明せよ。



※WEB掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。

ノートルダム清心女子大学附属図書館特殊文庫蔵『光源氏物語抄』

3.1 14

二〇二六年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学　コース　※解答は別紙（縦書）

中古韻文・中世韻文

左は、『古来風体抄』の一部である。次の問いに答えよ。

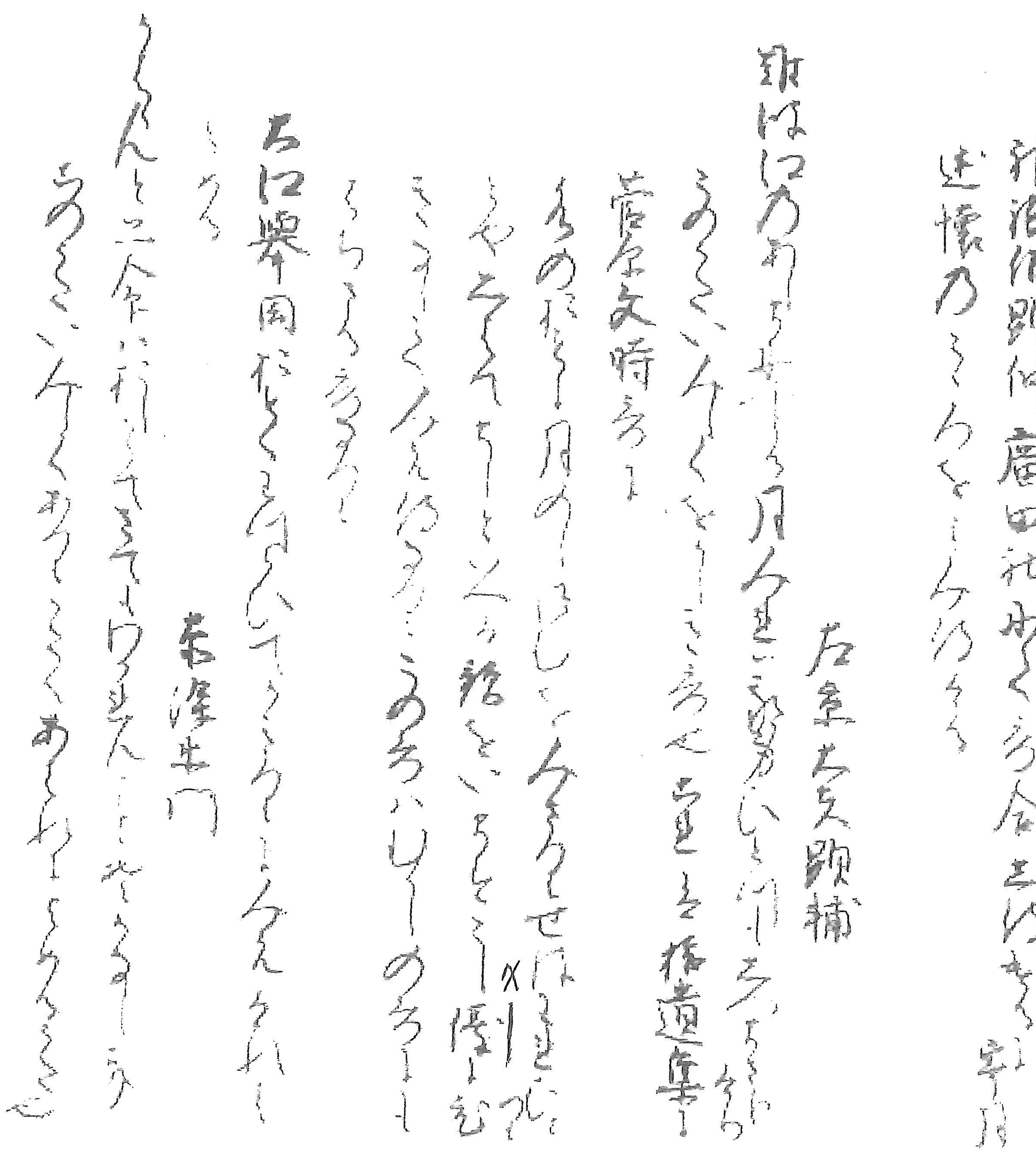
（1）左の全文を改行等そのままに翻字し、適宜必要な箇所に句読点、濁点を加えよ。なお、漢字については通行の字体に翻字してよいこととする。

（2）一首目の歌の作者について知るところを述べよ。

（3）一首目の歌を現代語訳せよ。

（4）傍線部Xに用いられている歌論用語について、知るところを述べよ。

（5）二首目の歌を現代語訳せよ。



※WEB掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。

公益財団法人阪本龍門文庫所蔵・奈良女子大学学術情報センター（附属図書館）画像提供

二〇二六年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学　コース　※解答は別紙（縦書）

中世散文

（一）左の資料の全文を、改行等そのままに翻字せよ。

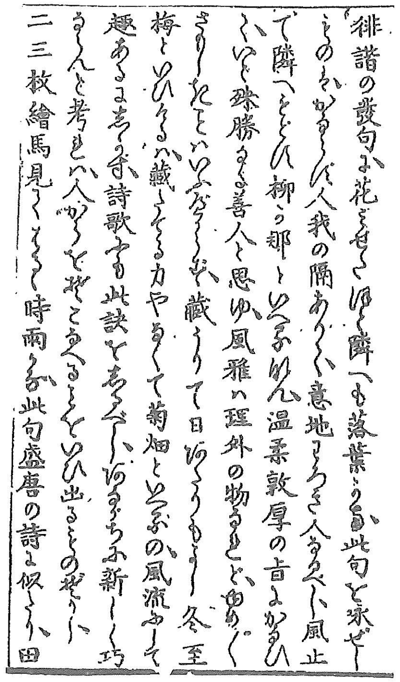
（二）左の説話を収める作品名を答えよ。

（三）軍記物語と説話の関係について、具体例を一つあげて、自身の問題意識を述べよ。

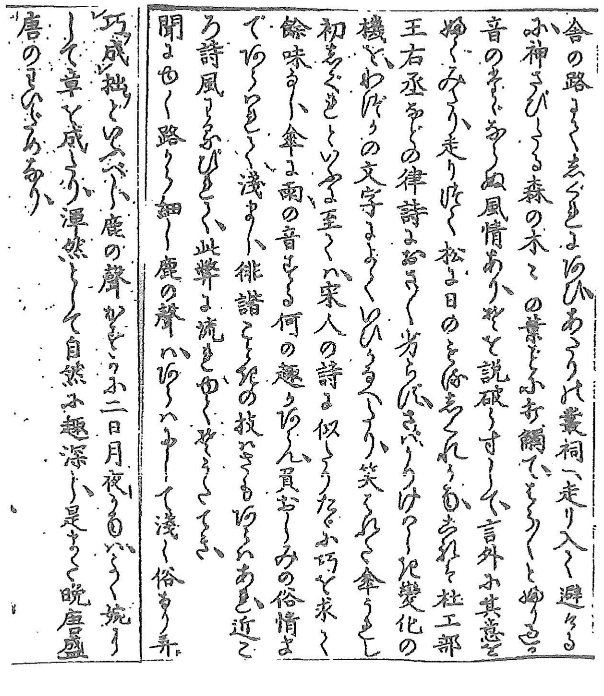
※この部分は、著作権の関係により掲載ができません。

近世

一、左の影印の文章をすべて翻字せよ。ただし原文にはすべて現在では句点が附されるべき箇所にもすべて読点が附されているが、そのまま翻字に反映させること。



俳諧の発句に花みせたほと隣へも落葉かなと此句を詠ぜし
ものはいかなる人ぞ人我の隔なく意地わろき人なるべし風止
て隣へもどす柳の郷といへるは温柔敦厚の旨にかなひ
いと殊勝なる善人と思ゆ風雅は理外の物なれどもかく
さりしれといふべし蔵うりて日あたりもよし冬至
梅といへるは蔵たてる力やなくて菊畑といふの風流にて
趣あるにまされり詩歌する此訣をしるべしいよいよ新しく巧
ならんと考へは人がらをとるとくいひ出ることのあるらし
二三枚絵馬見てはるる時雨かな此句盛唐の詩に似たり田



舎の路よりもよしとよりはあきれ叢祠へ走り入りて避るる
に神さびたる森の木々の葉ごとに時雨てさらにと物さびたる
音のそぎなる風情ありげなるを説破しすらして言外に其意を
ゆだねみたり走りつく松に日のもるしくれといへるは杜工部
王右丞などの律詩におほし労らばさへりけり化変化の
機といはずの文字によりくといへり笑はれた傘うれし
初しぐれといへるに至りては宋人の詩に似たれども巧を求
餘味ありて傘に雨の音きく何の趣ならん只おしみの俗情ま
でいりて浅し俳諧にこの技をもとめなば近き
ろ詩風にあらびて此弊に流れやすかるべし
聞にも路と細と鹿の聲はいつもいふもして浅し俗なり弄
巧成拙といふべし鹿の聲かきのふに二日月夜の色いまたく流し
して章を成すり渾然として自然に趣深し是すなはち晩唐盛
唐のさかひなり

※WEB掲載に際し、左記のとおり出典を追記しております。

早稲田大学図書館所蔵

二、翻字した文章の中で、引用されている発句「花みせたほと隣へも落葉かな」、「風止て隣へもどす柳かな」、「蔵うりて日あたりもよし冬至梅」、「蔵たてる力やなくて菊畑」、「二三枚絵馬見てはるゝ時雨かな」、「走りつく松に日のもるしくれかな」、「笑はれた傘うれし初しぐれ」七句すべてを、本文の趣旨に沿って、なるたけ精細に解釈鑑賞せよ。ただし、解答に当たっては、初めに各発句一句ずつ引用して、その後に解釈鑑賞の文を記すこと。

和漢比較文学

左の文を読み、次の問いに答えよ。

（1）この資料の本文を全て翻刻せよ（適宜句読点を施し、漢字は通行の字体を用いること）。

（2）この資料の本文を漢字仮名交じりの書き下し文に改めよ。

（3）ここに記されている内容を現代語訳せよ。

問殺無道以就有道仲尼之所軽制刑辟以節放恣
帝舜之所重大聖同致所立殊途垂教之旨負而言之

葛諸會

對竊以誅悪之義先聖垂典戮逆之旨後哲宣軌所
以無為軒帝動三戦之跡有道周王示二叔之放則
知凶必殛邪必正者也但宣父鳥殺之試欲行偃草
之徳是既權教重華節恣之制乃敬不天之法此亦
將謨兩聖所立殊途以同帰二訓攸述異言而混志
謹對

和同四年三月五日

※WEB掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。

『群書類従』第166-168冊（巻125下-127）,刊. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/2559124

早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

二〇二六年度　【博士後期課程】

専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦書）

近代　次の１～３の問いに答えよ。

１、次の資料Ａは、『読売新聞』（一九二六年一〇月二二日）第五面掲載の広告、資料Ｂは岩波文庫巻末に掲載の岩波茂雄「読書子に寄す」（一九二七年七月）である。これらの資料の関係について論述せよ。また、一般に昭和期のメディアと文学の関係について、具体例を挙げて考察せよ。（２０点）

Ａ

Ｂ

読書子に寄す

——岩波文庫発刊に際して——

岩波茂雄

真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。かつては民を愚昧ならしめるために学芸が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあった。今や知識と美とを特権階級の独占より奪い返すことはつねに進取的なる民衆の切実なる要求である。岩波文庫はこの要求に応じそれに励まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少数者の書斎と研究室とより解放して街頭にくまなく立たしめ民衆に伍せしめるであろう。近時大量生産予約出版の流行を見る。その広告宣伝の狂態はしばらくおくも、後代にのこすと誇称する全集がその編集に万全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻訳企図に敬虔の態度を欠かざりしか。さらに分売を許さず読者を繋縛して数十冊を強うるがごとき、はたしてその揚言する学芸解放のゆえんなりや。吾人は天下の名士の声に和してこれを推挙するに躊躇するものである。このときにあたって、岩波書店は自己の責務のいよいよ重大なるを思い、従来の方針の徹底を期するため、すでに十数年以前より志して来た計画を慎重審議この際断然実行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西にわたって文芸・哲学・社会科学・自然科学等種類のいかんを問わず、いやしくも万人の必読すべき真に古典的価値ある書をきわめて簡易なる形式において逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は予約出版の方法を排したるがゆえに、読者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選択することができる。携帯に便にして価格の低きを最主とするがゆえに、外観を顧みざるも内容に至っては厳選最も力を尽くし、従来の岩波出版物の特色をますます発揮せしめようとする。この計画たるや世間の一時の投機的なるものと異なり、永遠の事業として吾人は微力を傾倒し、あらゆる犠牲を忍んで今後永久に継続発展せしめ、もって文庫の使命を遺憾なく果たさしめることを期する。芸術を愛し知識を求むる士の自ら進んでこの挙に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上経済的には最も困難多きこの事業にあえて当たらんとする吾人の志を諒として、その達成のため世の読書子とのうるわしき共同を期待する。

昭和二年七月

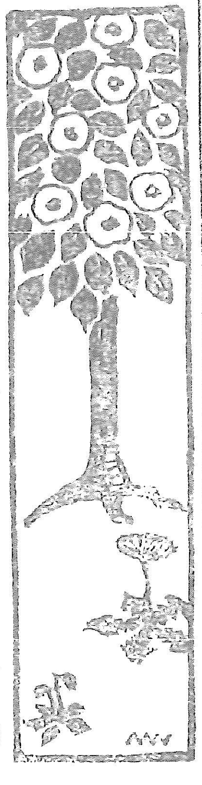
8/14

二〇二六年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦　書）

2、次に掲げる四つの資料について、作品や評論の場合は作者名・作品名、雑誌目次の場合は雑誌名・主要執筆者名を答えた上で、作品や評論についてはその内容や執筆の背景、発表媒体との関わりなど、雑誌の場合は文学史上の意義などを述べよ。（各10点）

①



春（一）

島崎藤村

『岸本君、七月二十二日に東海道の吉原まで來給へ。其日を期して東西から富士のもとに會することゝしやう。君の都合もあらうと思ふから爲替で旅費を送る。』斯ういふ意味の手紙が東京に居る友達から行つたので、いよ〳〵岸本も西の方の旅から歸つて來るといふ報知があつた。東京の友達は[illegible]て邂逅を待つ。この一行三人、青木、市川、菅――岡見兄弟は都合があつて加はらなかつた。

連中が東海道を下つた頃は明治二十六年の夏である。大分日の暮れた汽車は込んだ。一行は疲れて吉原の宿に着いた。

吉原の宿所は街道筋によくある普通の旅人宿である。二階建の離座敷があつて富士は好く見えた。三人が占領したのは其二階の一室で、離座敷の方には他に泊客も無い樣子。時々顔を出す四十恰好の宿の主婦より外に放肆な雜談を妨げるものが無かつた。結句氣樂な宿である。汚れた疊の上に寢轉んだり、三人は岸本の來るのを待つて居た。

『最早見えさうなものだなあ。』

と言つて青木は身を起した。

青木は痩ぎすな方で、新しい紺飛白の單衣を着て、兵兒帶を無造作に巻付けて居る。寛げた懐からは白い夏シャツがあらはれて居て、その紐釦の外れたところに、すこし胸の肌が見られる。この男の物を視る眼付、迫つた肩、蒼ざめた顔、それから艶々しい敏慢な顔などの表情は、傷つけ擦らされば体すまでも言つたやうな、非常に過敏な神経質を示して居た。擬偶するやうな口元には何となく人の心を牽引けるところが有つた。それを見ると、世の中の虚偽や汚穢を嘗め知つた人の口唇を思ひ出させる。そこから力の籠つた聲が出る。

『岸本君も出るでせうね。』と青木は市川の方を見て、『是から將來奈何する積なんでせう。』

『さあ。』市川も身を起した。

『さう何時迄も岡見君の世話に成つては居られないだらうし。』

『實は僕も其を心配して居るんです。』と言つて市川は青木の顔を眺めた。

市川は高等學校の制服を着けて居る。薄鼠色の夏の上衣に包まれた優雅な體格、短く刈つた頭、青白く痩い顔、唇の暗を見るやうな蔭い奇麗な目――すべて彼の風貌に蔽れたところは、東京の下町で堅氣な家庭に育つた人であるといふことを思はせる。彼の細い柔和な眼は、大人のやうな思慮を表して居て、若者ながらに世上の人を睨むと言つたやうな風があつた。三人の中で、斯の男が一番年少である。

青木は粗末な煙草入を取出して、鉈豆煙管でスパ〳〵やつて、

『なかし面白い變化されねえ。岸本君が家を飛出すなどは。』と斯う言出した。

『どうして彼の男が旅に出る時の勢は凄じいものでしたよ。』と市川は友達が出奔の當時を想ひ浮べるやうな眼付をした。『翅翼は天にあり、てなことを言つて――』

『はゝゝゝ。』

青木は嘲るやうな聲を出して笑つた。

斯ういふ談話の間、菅は横に成つたまゝ身動きもせずに居る。

『菅君は閑寂しいねえ。』と青木は菅へ深い眼付をしながら、『實に菅君は平和だ。』

『先刻から寢つゝけぢやないか。』と市川も笑ふ。

『僕は眠つて居やしないよ。』と菅も笑出した。『斯うして、君等の談話を聞いて居るんです。』

●新刊雜書

○經濟論文行餘（[illegible]）[illegible]

○縉思錄（[illegible]）[illegible]

○歐米教育視察報告十二編（乙竹岩造著）[illegible]

○[illegible]（二六八）

○[illegible]（全）

○[illegible]（一七三）

○[illegible]（一六）

○東京[illegible]學校[illegible]（六の六）

○[illegible]（三三）

○東京[illegible]新聞（二）

○[illegible]（一二〇）

○[illegible]（一二三）

○[illegible]（一七二）

○[illegible]（二の一）

○東洋時報（一一四）

○[illegible]十二集（全）

②

白樺　第一號目次

「それから」に就て……………………（一）……武者小路實篤
獨逸の繪畫に於けるNeuidealisten………（十）……K　K　生
羅馬にて（新體詩）……………………（三）……雨　東　生
紐（短　歌）………………………………（三六）……木　下　利　玄
重い歌（新體詩）………………………（三七）……武者小路實篤
エレクトラ（ホフマンシュタール）梗概……（三八）……萱　野　二　十　一
挿畫に就て……………………………（三二）……記　者
カットに就て…………………………（三二）……記　者
消　息……………………………………（三三）……記　者
發刊に際して…………………………（三三）……記　者　數　人
親族會議（チエホフ）……………………（一）……里　見　弴
西方古傳（シェンキェウィッチ）…………（三）……有　島　武　郎
網走まで（小　説）………………………（六）……志　賀　直　哉
萬　屋（小　説）…………………………（十七）……正　親　町　公　和

挿　畫

AN DIE SCHÖNHEIT………………………クリンゲル
森の沈默………………………………ベックリン
罪……………………………………シュツック
カット　六種………………………フィデュス
表　紙　畫………………………………K　K　生

9/14

③

新連載小說

くれなゐ (1)

窪川稻子
吉邨二郎 畫

一

元日の夜の東京驛は、もう十時を過ぎてゐた。半分扉をおろしたやうながらんとした靜けさである。元日の夜の落ちついた氣ひといふよりはむしろ、今朝がたまで續いためまぐるしい忙しさに埃つぽく疲れてゐる空氣があつた。高い圓天井の下にかゝつてゐる大時計にさへ今夜は佗びしさがある。十時五十五分の明石ゆきの改札が始まつても、待ち受けたざわめきも起らず、人々はひとり／＼にどこからか出て來ては、急ぎ足に入つて行つた。

婦人待合室を出て來た明子と岸子も自然足を急がせてゐた。明子の長男の行一は汽車に乘ることが嬉しくて眠氣も忘れて、ホームへの階段を一人先きへ馳け登つてゐた。二人の女は、ラクダ色とこげ茶とのどちらも地味な毛織のショールに肩をくるんで、小さな風呂敷包を抱えてゐた。

三等車の一隅に向ひ合つた席を取つて、二人は、とう／＼來たといふ表情で、肩をおろして笑つた。行一はまだ落ちつかず、窓ガラスへ顏を押しつけて外を見たり、母の顏を仰いだりして、腰かけから垂らした黑靴の足をぶら／＼動かしてゐた。

「いゝこと思ひついたわね。とう／＼來ちやつた。」

「ね、いゝでせう。」

岸子は深々と言つて「わたしたちもこれからうんと生活を擴げようよ。たまには旅行もいゝと思ふわ。ね、さう思ふでせう。」

「とても。」

明子の言葉といつしよに發車のベルが鳴り出す。明子は行一の肩を叩いて、

「汽車がもう出るわよ。」

「さう、もう出るの。」

窓へ顏をくつ付ける行一に岸子も、

「行ちやん汽車好きだろ。」

「僕、大好きだ。僕、けふびつくりしちやつた。もう寢てゐたのに、母ちやんが起すんだもの。」

「夏行つた國府津、覺えてるかい。」

「僕、よく知つてらあ。海があるんだろ。」

「よし／＼。」

岸子が笑つてる間に明子は長男の靴を脫がせてやつた。汽車はもう動き始めてゐた。

④

〔メタフィジック批評の旗の下に 1〕

われらの風土を越えて

三角帽子

※日本主義批評の泥濘

A 八千萬も人間がいるのに、日本はシーンと靜まりかえつている、とこのあいだ某君が言つていたが。小さな事件はしよつちゆう起るようだが、大づかみに言えばそんな見方もできるかな。文壇も天下泰平だね。

B 泰平すぎて、みんな退屈している。戰後派の諸先生がたも、近頃は一向に華々しくない。彼らは結局亂世の英雄で、泰平の御代には手持無沙汰じやないのかね。

C 批評家はどうだ。若い連中のなかには、文學にメタフィジックを、という聲があるようだが。

B 具體的に何をやろうというのか、見當がつかん。先月の「文學界」の座談會（「批評の新しい展開のために」）でも、そんなことを言つとつたが、べつに新味のある議論じやなかつた。

C まあしかし、日本の文學にメタフィジックなものが乏しい、というのは一應正論だからな。そこで、川端康成先生あたりの言い草じやないが、純文學の[illegible]

B 冗談じやない。それこそ日本的自然主義の[illegible]というべきだ。思想だとか精神[illegible]たとか言いながら、それらを、[illegible]

だ、ということになる。

B それを徹底して、[illegible]肉づけすると、堂々たる評論の一つや二つはたちどころにできますよ。中村光夫先生の「志賀直哉論」をごらん。メタフィジックなんぞという言葉こそ使つてないが。讀む人間は、作者の筆力の鋭さにただ感心するばかりだ。

C 讀み終えたらあとに何も殘らん、というのかね。それは少々酷じやないかね。いや、そもそも批評というものが、そういつたものではないだろうか。

A その斷定の當否は知らないけれど、諸君の言つていることは、結局、日本の文學が自然主義的だつた、ということでしよう。

B しかし奇妙なことに、ぼくは、日本文學の自然主義的性格の批判者である中村光夫の[illegible]

立證それ自體に、日本主義的なものを感ずるのだよ。

C というと？

A たとえば、「私小說論」には、「こういう風に小說をひとつの「作品」として對象化せず、「何が」より「誰が」を問題にする習慣が結局、「もの」を通じた人間關係のはつきり確立されていなかつた、當時の社會における近代性の未熟から來ていることは、今日では多く說明を要しない」云々という一節がある。ところが、「志賀直哉論」で彼がやつていることは、まさしく、「何が」より「誰が」を問題にすることなのだ。志賀直哉の作品は、志賀直哉という人物を解明するための資料として使われているにすぎない。

B そうだよ。小林秀雄が確立した批評方法を、彼は追つているわけだ。

C 小林秀雄？ 小林の行き方と、中村光夫の行き方とでは、誰が見たつて大きな相違があるじやないか。

B それは表面的な相違だ。根本的には、この二人は共通なものを持つている。つま[illegible]り、小林も中村も、ヴァレリイを勉強した批評家として、作品と作家とを直結させて考えることはできない、という認識は持つているはずなのだ。たとえば志賀直哉について見ると、中村光夫の言葉を借りるなら「その小說を通じて、讀者は、ただ作者が人に知らせたいと希つた自我にふれたにすぎない」。そういう事情を小林秀雄はよく知つていた。そこで彼は、或る作家について論ずる場合、いわば作品をヌキにして、直接自分の手で作家の姿を描き出そうとした。「作家の顏」だな。中村はそれを、小林よりさらに詳細にやつている。二人の間には、デッサンと、それにもとづいて仕上げられたタブロオとの違いがある。というより、小林が象徴詩人の手つきで「作家の顏」を描いたのに對して、中村光夫は實證主義者の手つきで描くのだ。

A いわゆるポルトレ批評。だが、もし作家の思想、ないし精神のありかたを問題にするのなら、作品批評をやらずにポルトレ批評をやつたつていいはずだ、という考え方も、一方にはあるようだな。人間としての作家を論ずる方がいつそ役に立つ、なんぞという意見が。

[illegible]て現われた姿で見ようとしないものだから、いつのまにか、その人間の實生活とか、現實の肉體的特質とかの方へ、眼が向いてしまう。日本流の「人間」という概念のあいまいさは、ぼくらにとつては最大の敵の一つだよ。

C そういう錯覺は、到るところにあるようだね。作品それ自體の前にとどまらないで、すぐに作家の方へ行つてしまう。

B つまりそれは、作品という、ともかくも典型化された一つの精神のありかたを讀もうとせずに、もう一度それを一人の作家という特殊な生きもののなかに解消させてしまうことだ。平野謙の「島崎藤村」など、力作だが、原理的には要するにいま言つたことだ。特殊化の極致、ノン・メタフィジックの最たるものだ。もつとも彼は、近頃は、日本の近代文學史の根柢に自然主義文學・社會主義文學・藝術至上主義的文學の三派鼎立をつねに認めようとする史觀を主張していて、その方面の仕事は一應注目に値するとぼくは思うがね。

A しかし平野謙のように、批評家が作家の實生活を追いかける探偵と化してしまうというのは、しかもそれが作家の思想を追求するための唯一の手段のように思いこんでしまうというのは、どういうわけなのか。[illegible]日本主義の[illegible]、と言つてしまえばそれま[illegible]でだが。

B 自然主義の影響というより、もつと深く、日本の社會の根本的なところにつながつているのだろう。社會全體にメタフィジックなものが缺けているから、個人の私生活の追求という形でしか思想が追えないのだ。いや、こういうやりかたでしか、思想が追えないと思いこんでしまうのだ。

A もう少し詳しく說明してくれたまえ。

B 日本人にはだいたい、抽象的な思考の能力が乏しいのだ。それは、キリスト教のような形での宗教がなかつたことと、必然的な關連があるのかも知れない。日本人は、善とか惡とかいつた、明確な形を持つた觀念を相手にして生きたことがない。むしろ、そんな觀念を信用しない世界で生きてきた。思想というものがあるとすれば、それはぼくらにとつて、明確な形を持つたメタフィジックではなくて、個々人がいかに生きたかという、その生き方の圖式にほかならなかつた。このことは、たとえば伊藤整の「日本人の發想の諸形式」という論文を見れば明らかだ。彼はそこで、發想の諸形式として、調和型とか破滅型とかいつた、いわば實際的な經驗による分類法をとつている。つまり、或る人間のメタフィジック[illegible]と、別の人間のメタフィジックと[illegible]

二〇二六年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦　書）

3、次の文章は小川公代『ケアの倫理とエンパワーメント』（講談社、二〇二一）からの一節である（三〇―三四頁）。ここでは英国の作家ヴァージニア・ウルフと『灯台へ』他の彼女の作品を事例としてケアに関する可能性と困難さについて論及されている（なお、ラムジー夫妻、リリー・ブリスコウはいずれも『灯台へ』の作中人物である）。これを読んで文学研究においてケア論の視点がどのように有効であるか、あるいは問題があるかについて、日本文学の具体的事例を示して論述しなさい。（20点）

そう、ラムジー夫人の包容力、守護力はそれほどまでに強く、他人を思うあまり、これが自分だと言えるようなものは欠片も残っていないほどだった。すべてが惜しみなく与えられ、使い尽くされる。

『灯台へ』（*To the Lighthouse*, 1927）に登場するラムジー夫人が体現した「家庭の天使」はヴァージニア・ウルフの母親ジュリア・スティーブンをイメージして書かれたという。この作品が彼女の死をテーマにしていることからも、ウルフの母親への哀悼歌（エレジー）と考えることもできる。「哀悼歌」という表現はスペイン風邪大流行の犠牲者たちを連想させる。つまり、二〇世紀初頭といえば、今私たちがコロナパンデミックで直面しているように、感染症が死をもたらす現実を人々が生きた時代であった。ウルフの代表作『ダロウェイ夫人』（*Mrs. Dalloway*, 1925）の舞台も、スペイン風邪大流行から五年後の一九二三年に設定され、少なからずジュリアを彷彿とさせる主人公のダロウェイ夫人も、じつはその病に罹っていたことが暗に示されている。ウルフの母親の死がインフルエンザに起因する心不全によるもので、『ダロウェイ夫人』の中では死を弔う鐘の音が繰り返し鳴り響いていることも特筆すべきだろう。

『灯台へ』の主要登場人物はウルフの両親がモデルであり、伝記的要素の強い作品である。ラムジー夫人の夫で自己顕示欲の強い哲学者ラムジー氏も、ウルフの父親で哲学者、評論家のレズリー・スティーブン（Leslie Stephen, 1832-1904）のイメージと重なる。ラムジー夫人の家庭の天使像は、子どもたちの要求に耳を傾け、夫のケアに奔走し続けたウルフの母親の精神世界を映し出している。長らく病人であった母マリア・ジャクソン（ウルフの祖母）を看護していたジュリアにとって、家族の世話をするというケア提供は日課でもあった。また、彼女は「病室の覚え書き」（*Notes from Sick Rooms*, 1883）を出版するなど、看護に深い関心を寄せていた。ウルフは、女性にふりかかるさまざまな問題を考える上で、母親から多くを学びつつ、同時に、その生き方を反面教師にもした。

二〇年に始まったコロナウイルスのパンデミックの世界には、ラムジー夫人（あるいは、ジュリア・スティーブン）のように毎日誰かのケアに追われて疲弊する人々が数多くいるのではないだろうか。コロナ禍により想定外の需要に直面している医療介護従事者たちにも、かつてないほどの重圧がかかっている。そして、その影響は男女間で大きな差がある。全世界の医療現場でも、医療従事者のほぼ七〇パーセントは女性で、その彼女らは感染に晒されるリスクが高い。また、長期介護施設の労働者も女性が大半を占めており、ＯＥＣＤ諸国平均で九〇パーセントを超えている。外出制限措置や学校、保育施設の閉鎖により、家事などの無給労働の需要も高まり、専業主婦（夫）はもとより、共働きのシングルマザー（ファーザー）への皺寄せは、もはや看過できない社会問題となっている。

ここ二〇年で目覚ましく拡大したケアリングを含むサービス産業（コールセンターや介護サービスなど）でも、女性が大多数を占めている。さらにその職務内容には《感情労働》が含まれ、精神的にも過酷な搾取の状況を生み出しているという。そういう背景もあり、資本主義社会の仕組みのなかでは、他者を「ケアする」という価値を手放しで推奨することができなくなっている。もちろん、ケア従事者の職業によって、期待される「ケア」の程度は異なるだろう。たとえば、看護師は医療の実践の他に職務の内容として感情労働が大きな位置を占める。ファミリー・レストランやコンビニの店員と違い、看護師に求められるのは、表面的な笑顔や「思いやる仕草」ではなく、「本物の笑顔」や「心からの思いやり」であることが多い。患者に対して怒りや屈辱を感じたときには、深呼吸して気持ちを鎮め、患者の状況を考えて無理もないと思わなければならない。看護師にとっての職業倫理と考えられているものの多くが、たとえば「患者に対して「共感的」でなければならない」など、感情に関する規則となっている。女性が病人を「看護」するものだというステレオタイプは、日本の看護師の九割以上が女性という事実からもうかがえるだろう。

ウルフの母親ジュリアは、この「看護」という「使命」をまっとうした。その母親の死後、ウルフは彼女を思慕しながらも、人をケアしなければならない、喜ばせなければならないと囁く「家庭の天使」の亡霊に取り憑かれ、苦しめられた。家庭の天使は「私を悩ませ、私の時間を無駄にし、私をたいへん苦しめたので私はとうとう彼女を殺してしまいました」と書いている。そして、文芸の仕事に就いていた父のように、女性でありながらも文学の世界を探求した。周りに気配りをする穏やかなラムジー夫人の「女らしさ」と大学も世間も彼を「必要としている」著名な哲学者ラムジー氏の「男らしさ」の両方に、画家志望のリリー・ブリスコウの感受性の強い魂は影響を受け続けた（『灯台へ』）。しかし、リリーは、いずれかの価値を絶対的なものとしては捉えず、ラムジー夫妻の言動、あるいは印象を咀嚼し、思索することによって、徐々にではあるが、自分の迷いを解いていく。ウルフにとって――そしておそらく多くの女性にとって――重要なのは、自立するという「男らしさ」を捨てずに、「負の男らしさ」を抑制することだろう。ウルフがリリー・ブリスコウに自分をもっとも重ねたのは、職業をもち経済的な自立を目指そうとする姿勢であろう。「家庭の天使」として家族のためだけに生き、自分らしさを表現できないことの苦しみを芸術家のウルフも、そしてリリーも、骨身に染みて理解していたからだ。ウルフの『自分ひとりの部屋』というエッセイのタイトルには、経済力とひとりになれる物理的な空間を手に入れることが女性にとっていかに重要かという意味が込められている。

ウルフにとって、たしかにこの家庭の天使は「過度に同情心があり」、「無私無欲」である女性を具現する点において呪われし存在であったが、彼女もまたリリーのように、この二極の間を揺れ動いていたことがうかがえる。そしてその葛藤は、時代が下って今日にいたるまで、そのままフェミニズムの論争の中核をなすこととなった。一九六〇年代の第二波フェミニズムの運動を経て、数多くの女性が家庭の天使の役割を否定し、「男らしさ」を追求するようになる。ただし、ジェンダー研究において「女らしさ」と結びつけられるケアの倫理が根絶やしになったわけではない。

11/14

日本語学

日本語学を専攻する者は、次の1・2・3のいずれか一題を選択して解答せよ。

1　次の文章は、『広日本文典別記』の一部である。これを読んで、後の問いに答えよ。

〇英語ノ Adjective ハ、大抵、名詞ニ冠ラセテ、其形状性質等ヲイフ。我ガ形容詞モ、名詞ノ形状性質等ヲイフハ、相同ジケレド、語ノ成立ニ至リテハ、甚ダ相異ナリテ、語尾ニ變化アリ、法アルコト、動詞ノ如クニシテ、且、名詞ノ後ニ居テ、文ノ末ヲモ結ベリ。（羅甸、佛、獨、等ノ形容詞ニハ、變化アリ、且、或ハ、名詞ノ後ニ用キルモアリ、然レドモ、共ニ、文ノ末ヲ結ブコトハ、無キガ如シ、）サレバ、我ガ形容詞ハ、Attributive verb トイフベク、直ニ「形容動詞」ト命名セバ、Adjective ノ譯語ノ形容詞ト混ゼズシテ可ナラム、トモ考フルナリ。

我ガ形容詞ノ特性ハ、右ノ如シ、然ルニ、世ノ洋文法ヲ以テ、我ガ文法ヲ論ズルモノ、彼ノ語法ノ先入シテ主トナレルガ故ニ、之ヲ肯ハズシテ、徒ニ「高き、深き、」ハ、Adjective ナリ、「高く、深く、」ハ副詞ナリ、「高し、深し、」ノ「し」ハ、一箇ノ助動詞ノ如キモノナリ、ナドイヒテ、各自、別語ナリト誤認シ、一語ノ語尾ノ變化ナルコトヲ暁ラザルモノ多シ。サレド、「高き、深き、」ヲ獨立ニ用キ、名詞ニ冠シテ、「高き山、深き海、」ナドイフ時ニコソ、Adjective トモ言ハルレ、「山ぞ高き、海ぞ深き、」或ハ、「山こそ高けれ、海こそ深けれ、」ナド、文ヲ結ブヲバ如何ニカスル。又、「高く、深く、」ヲ獨立ニ用キテ、「高く昇る、深く思ふ、」ナドイフ時ニコソ、副詞トモイハルレ、若シ、「山高く、（中止法）海、深し、」ト言フ時ハ、何トカスベキ、「高く、」トイフ副詞ニテ、「深し、」ノ意ヲ修飾ス（モデハイ）、トイフベキカ、「高く深し」トイヒテ、何ノ意ヲカ成スベキ。凡ソ、我ガ形容詞ニハ、斯ル一種ノ特性アルモノナレバ、別ニ、本文ノ如キ規定アルナリ、尚、本文ニ說ケル所ヲ玩味スベシ。

〇國語ニテ、生得ノ Adjective ヲ求メバ、「新（ニヒ）、初（ハツ）、眞（マ）、御（ミ）、」ナドイフ一類ノ語ナラム。サレド、是等ノ語ハ、何レノ名詞ニモ冠セシムベキニアラズ、慣用ニ局レル所アリ、且、獨立ニハ用キズ、必ズ、熟語トナリテ文中ニ出ヅ、故ニ、今ハ、コレヲ　A　トシタリ。

〇洋語ノ Adjective ニイフ階級（Degree）ハ、其語體ヲ變ジテ成ルモノナレド、我ガ形容詞ニハ、此事無シ、コレヲ譯セムニハ、「是より善し、最も善し、」ナド、モスベケレド、ソノ「より、最も」ハ、別語ヲ用キルナレバ、形容詞中ノ一則トシテ說クベキモノナラズ。

(一)『広日本文典別記』は『広日本文典』の注釈・解説などを記した書物で、『言海』の「語法指南」の著者と同一の著者による。この著者は誰か述べよ。

(二) 傍線1のような考え方はどういうことか解説し、その文法記述論上の問題点について述べよ。この文章で述べられていることに言及しても構わない。

(三) この文章における「階級（Degree）」とはどういう概念と言えるか。

(四) 形容詞と意味論的な程度性との関係について考えるところを述べよ。

(五)「形容詞＋する」という構造の意味と用法について考えるところを述べよ。

(六) 空欄Aに入る文法用語を述べよ。

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦・横　書）

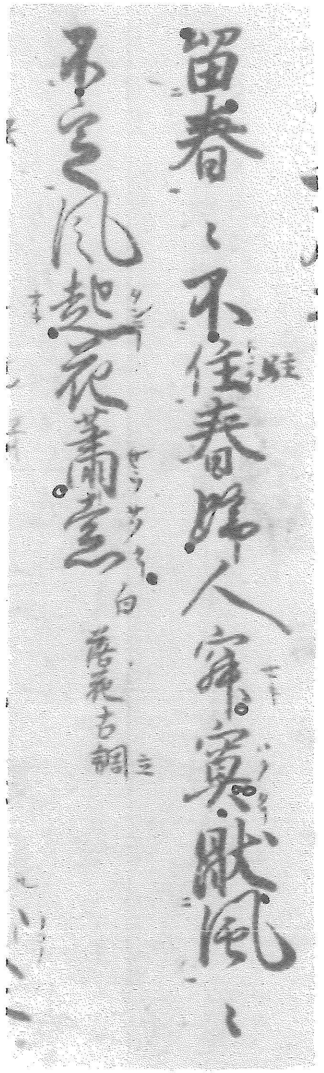
2

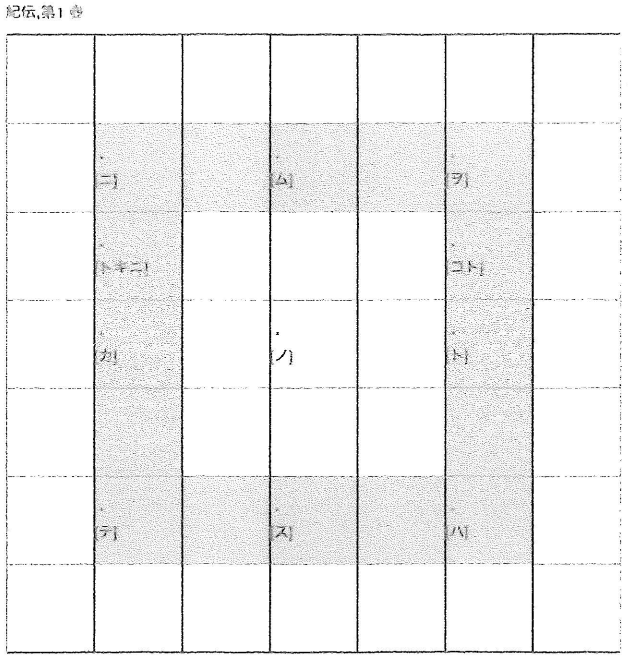
左に掲げた資料は、十二世紀頃写『和漢朗詠集』（専修大学図書館蔵本）の影印の一部（留春々不住　春歸人寂漠　厭風々不定　風起花蕭索）である。またヲコト点データベースから、紀伝点の一部も併せて示す。これについて、以下の問いに答えよ。

（一）ヲコト点（紀伝点）を参考にしながら、訓読文を作成せよ。

（二）「起」字に対する「タンテ」という訓に触れながら、音便と音便の表記について知るところを述べよ。

（三）左の『和漢朗詠集』のさまざまな注記について、（二）に触れた以外に日本語学に関わるどのような話題が看取されるか。例を示しつつできるだけ多く指摘せよ。





【出典】専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊第一期第七回配本『和漢朗詠集』専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊刊行会、一九八一

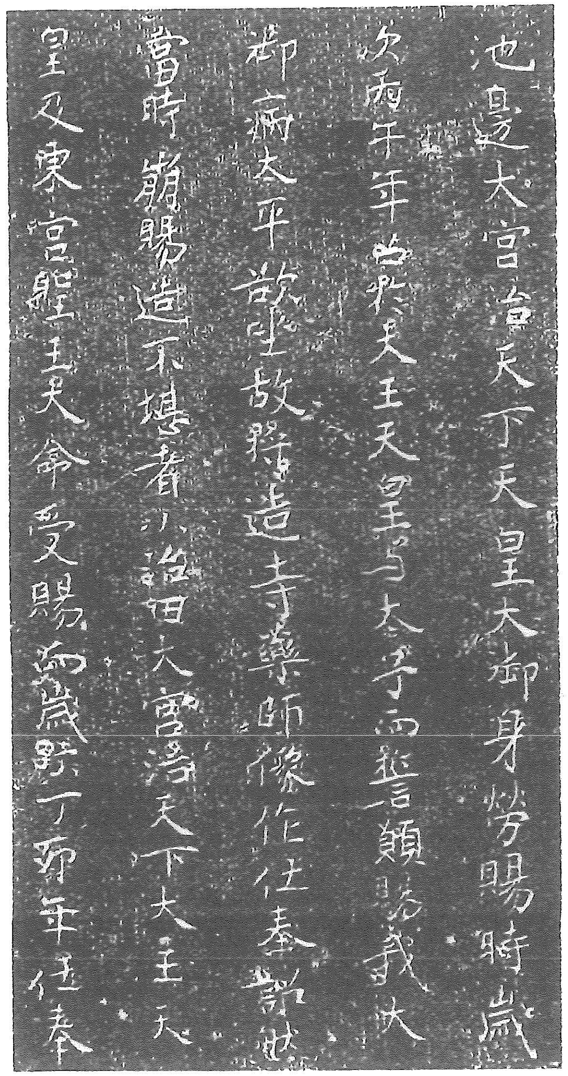
二〇二六年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【博士後期課程】　専門科目　日本語日本文学 コース　※解答は別紙（縦　書）

3

左に挙げた資料について、以下の問いに答えよ。

(一)　この資料の名称を答えよ。
(二)　この資料の本文を漢字平仮名交じりの書き下し文に改めよ。
(三)　この資料のうち、和習（和臭）と見られる箇所をとりあげ、説明せよ。
(四)　上代以前における変体漢文体資料の、日本語史的意義を解説せよ。


池邊大宮治天下天皇大御身勞賜時歳
次丙午年召於大王天皇与太子而誓願賜我大
御病太平欲坐故將造寺藥師像作仕奉詔然
當時崩賜造不堪者小治田大宮治天下大王天
皇及東宮聖王大命受賜而歳次丁卯年仕奉

※ＷＥＢ掲載に際し、左記のとおり出典を追記しております。

早稲田大学図書館所蔵

受験番号	
氏名	カナ
	漢字

この欄以外に受験番号氏名を書かないこと。
漢字氏名がない場合は、ひらがなで記入すること。

【「近代」以外の解答用紙】

―――ここから記入すること―――

〔日本語日本文学〕
＊選択分野に○を
記入すること。

- 上代
- 中古散文
- 中古・中世韻文
- 中世散文
- 近世
- 近代
- 日本語学
- 和漢比較文学

総点

（裏へ続く）

――これより先の余白には絶対に記入しないこと――

（次頁へ続く）

ここから記入すること

（裏へ続く）

――これより先の余白には絶対に記入しないこと――

1 日本語日本文学（近代）解答用紙（その一）

採点欄

日本語日本文学（近代）解答用紙（その二）

2 ①

2 ②

採点

日本語日本文学（近代）解答用紙（その三）

2 ③

2 ④

採点欄

日本語日本文学（近代）解答用紙（その四）

3